

タイトル	社会影響評価の手法と二風谷ダム的事例
著者	岩崎, まさみ
引用	開発論集, 76: 89-109
発行日	2005-09-30

社会影響評価の手法と二風谷ダムの事例

岩 崎 まさみ*

1. はじめに

近年、開発事業にともなう環境影響評価（Environmental Impact Assessment）の重要性が認識されるに伴い、環境への影響と同様に地域住民の生活に及ぼす影響を明らかにする必要性が高まっている。この傾向は北米において顕著であり、これまで環境影響評価の一部として、関係する機関が独自の方法で行ってきた社会影響評価（Social Impact Assessment, 以降 SIA とする）を総合的にまとめてガイドラインとして提示する努力や、SIA を社会科学の緒分野に取り込み理論体系化する努力が見られる。

開発事業にともない SIA を行うことが一般的となりつつある北米の現状と比較し、日本の現状は異なっている。遅ればせながら 1993 年には環境アセスメントの推進をめざす「環境基本法」が制定され、さらに 1997 年には「環境影響評価法」が制定され、事業者には環境アセスメントが義務づけられた。これにより日本においても、環境影響評価が開発事業の前提条件として位置づけられつつあるが、SIA に関しては未だに開発事業に関わる個々の機関の手に委ねられている。長野県の廃棄物処理場の建設にともない住民を取り込んだ委員会を設立し、生活への影響を検討した事例（中信地区・廃棄物処理施設検討委員会 2003）など、SIA を試みる事例は日本国内にもあるものの、それらを体系化する段階にまでは至っていない。本稿では、第一に SIA 先進地域である北米において、SIA が実践されてきた経緯、さらにその手法が体系化されている現状を検証する。第二に日本の現状に目を向け、ダム建設に伴い SIA が行われている平取町の事例を検証する。現在、沙流郡平取町では 2006 年着工予定の平取ダム建設に伴いアイヌ文化伝承に及ぼす影響調査が行われている。その調査の過程で、同地域に 1997 年にすでに完成している二風谷ダムが、その建設以来、地域に及ぼしている社会的影響を明らかにする必要性が高まり、2004 年 11 月から「二風谷ダムの社会影響に関する調査」の予備調査が行われた。本稿ではこの調査の現段階での成果を分析し、今後本格的な社会影響調査を展開するための方向性を考える。また二風谷ダムに関しては、その建設に先駆けて、1975 年に「沙流川水資源問題に関する調査」が行われている。この調査では現在の二風谷ダムの社会影響を考える上で重要なデータが示されたことから、この調査報告書で示されている社会影響予測を検証する。

*（いわさき まさみ）開発研究所研究員，本学人文学部教授

2. 社会影響評価（SIA）とは

世界で最初に環境アセスメントを法制度化したアメリカ合衆国など「環境アセスメント先進国」では、開発事業が環境に及ぼす影響を評価する作業の一部として、地域の人々の生活に及ぼす影響が配慮されてきた。北米における SIA の歴史は古く、1970 年代にカナダ西部極北地域に住むイヌイットの人々を対象に行われた「バージャー調査」は、SIA の歴史の幕開けとして記憶されている。その後、北米各地で行われた多くの SIA の事例をもとに、1994 年にはアメリカ政府機関が「SIA ガイドライン」を完成させた。その後、このガイドラインは 2003 年に改訂され、現在に至っている。さらにバージ（Burdge）などを中心とした社会学者たちが、SIA の実践者としての体験を踏まえて、SIA の調査方法と理論体系の確立へ向けて努力を重ねている。

SIA の最初の事例として知られる「バージャー調査」は、1970 年代にカナダ北西準州を舞台に、当時、裁判官であるバージャーが率いる調査チームによって行われた。世界の原油価格の高騰を受けて、北極海の石油・天然ガスの開発が進められていた 1970 年代に、石油・天然ガスを北極海から、アラスカを通してカナダ南部に運ぶためのパイプラインの建設が計画された。パイプライン建設予定地域には、イヌイットなどの先住民族が住み、この当時も狩猟の伝統を守り生業を中心とした生活をしていた（Wilson & Urion 1995）。

マッケンジー・パイプライン建設計画に対して、カナダ首相の命を受けて、これらの地域における社会・経済的影響、さらに環境への影響を調査したトーマス・バージャーとその調査チームはパイプラインの影響調査のために、2 年間にわたり、西部極北地域の 35 のコミュニティーを訪問し、地域の人々に直接意見を聞いた（Berger 1977）。これらの現地での聞き取り調査に加えて、調査チームはこの地域の文化や環境に詳しい専門家約 300 人に聞き取りを行った。バージャーはイヌイットの人々の聞き取り調査の様子をテレビやラジオを通して流すことにより、カナダの一般の人に対して、この地域の人々がどのような生活をし、またどのような将来を望んでいるかを直接訴えかけるという方法を取った。

バージャーは報告書の中で、調査の結果を「文化的影響」「経済的影響」「社会的影響」の 3 つの分野に分け、さらに別の章で「先住民族諸権利の要求」に関する調査結果をまとめている（Berger 1977）。この調査の結論として、バージャーはパイプラインの建設は 10 年間凍結することを提言し、さらにその 10 年の間にカナダ政府は西部極北地域に住む先住民族と土地権利やその他の諸権利に関する交渉を進めることなどをカナダ政府に提言している。「バージャー調査（inquiry）」として知られるこの調査で、バージャーは先住民族の意思を汲み取り、それをカナダ政府の政策に反映させたという点で SIA の歴史に重要な一ページを記したばかりでなく、「バージャー調査」はその後のカナダ政府の先住民族政の方向付けに貢献した。

「バージャー調査」が SIA の歴史の始まりを記した後、現在に至るまでカナダやアメリカ合衆国を始めとする世界各地で SIA が行われてきた。これらの実践的データをもとに、SIA の手法、

及び体系的な理論枠組みを構築する努力は、SIA を専門に行うコンサルタントや研究者、また政府機関などにより行われてきている。

1994 年アメリカ合衆国政府多組織間委員会が SIA ガイドラインと理念 (Guidelines and Principles for Social Impact Assessment prepared by The Interorganizational Committee on Guidelines and Principles for Social Impact Assessment. May 1994) をまとめた。SIA ガイドラインと理念に関する多組織間委員会は、主にアメリカ合衆国政府の商務省、国立海洋局、そして国立漁業局の関係者によって構成され、それまでは事例ごとの実証的記録に留まっていた SIA を、始めて体系的にまとめ 1994 年 5 月に SIA に関するガイドラインとして発表した。

「SIA ガイドライン」では、「社会的影響」とは、新たな事業により影響を受けると予測できる日常の生活に見られる行為や価値観や精神性のあらゆる要因であると定義している。新たな事業が計画され、その事業により絶滅の危機にある特定の植物や動物に影響が及ぼすことが予測されると、当然のことながら、環境への影響に対して注目が集まる。しかしこれらの環境への影響と同等に重要なのは、社会的な影響であり、新たな事業により人々の生活に深刻な影響が及んだり、また女性やマイノリティー、貧困者や老人などのように弱い立場にある人々に影響が起きるとすれば、それらの影響は軽減されなければならない。SIA はこれらの社会的影響を予測し、適切に軽減することを目的として行われる。

SIA のアプローチは過去の実例との比較から、実証的に分析することを基本としている。つまりある事業に伴ってどのような社会的影響が起きるかを予測するためには、同じ地域の個々の人々やコミュニティ全体、または他の地域において同様の変化に対して人々、あるいはコミュニティ全体が過去にどのような行動をとったのかを知る必要がある。過去に同様の環境・社会変化が起きた地域 A で見られた人々の一連の行動を調べ、それと比較して、地域 B ではどのような変化が起きるかを推測することが SIA の基本的アプローチである。そのためにこれまでの多くの事例から、SIA で一般的に調査される項目を一覧表としてまとめた (付録 1 参照)。この項目に沿って評価作業を進めることにより、他の事例との比較、さらに新たな事業が展開する途中で連鎖的に起きる影響を繰り返し、評価することが可能になる。

「SIA ガイドライン」では、新たな事業や政策が行われる時間的な流れをいくつかの段階に分けて捉えている。それらの 4 段階は以下の通りである：計画の段階、建設・実施の段階、作業・維持、廃棄・撤回。さらにガイドラインでは評価を行う対象となる事業・政策の種類、それに伴う影響の特殊性を事前に分析する必要性を強調している。さらに実際の SIA の作業行程を段階的に分類して、10 のステップを抽出し、この段階を経て作業を行うことを勧めている (付録 2 参照)。

「SIA ガイドライン」では、効果的な社会影響評価実施のための原則として、9 つの項目を挙げている。その第一に「住民の参加」を挙げ、影響を受ける可能性のある個人やグループを把握し、それぞれの人々の参加を促すことが重要であるとしている。さらに、第二として誰が利益を得て、誰が損失を被るかを把握することにより、特に社会的に弱小な人々への影響に特別

な配慮をすることの必要性を強調している。

第三に社会影響評価作業の過程で、住民の視点を大切にすることを挙げている。つまり影響評価を行う際に、簡単に把握できる問題を評価の対象にするのではなく、住民が重要だと考えている事柄を評価することが重要であるとしている。この場合、アセスメントの経験者に、他の事例からどのような影響が見られるか、さらにそれらの優先順位を聞くことにより、効果的な SIA を行うことが出来る。

第四に SIA を行う方法やどのような前提によって行うのか、さらにそれらの重要性をどのように考えているか等の、SIA に関わる詳細を事前に公開し、一般の人々や政策決定者の目に触れるようにすること。この段階で、計画している SIA が法律で要求されている条件を満たすものであるかについても判断が必要である。第五番目にプロジェクトを計画・実施する側に対して、SIA の結果をフィードバックすることにより、計画の変更等を促し、影響緩和を可能にすることにより、SIA の目的を果たすことが重要である。また SIA の作業にはその作業に精通した社会学者（人類学者、社会学者など）の協力を得たり、またその分野の調査方法を活用することにより、調査の効率を上げる。

七番目には新しい事業が実施された後も、影響を測定するモニター・プログラムと影響緩和プログラムを計画・実施していく事が重要である。モニター・プログラムを継続することにより、事前には予測できなかった影響や事業計画の不確実な部分に対応していくことが出来る。

「SIA ガイドライン」は 2003 年に改訂され、「アメリカ合衆国における SIA の原則とガイドライン」として公開されている。2003 年の改訂では SIA の原則が書き換えられ、SIA が地域住民の意見を反映するものであること、さらに社会科学調査としての信頼性を高める必要性が強調されている。

「SIA ガイドライン」は最初に策定された 1994 年から約 10 年の間に、アメリカ合衆国のみならず、世界各地で行われる SIA に用いられてきた。2003 年の改訂には社会学、文化人類学、経済学などの専門家が多く関わり、実践的な経験に加えて、学術的インプットも多く、SIA の手法や理論の確立が一段と進んだと言える。

SIA の方法論の確立や体系化を行うことを目指している研究者として、バージを始めとする研究者たちを忘れてはならない。これらの専門家たちは前述のアメリカ合衆国多機関委員会の「SIA ガイドラインと原則」の策定に関わりつつ、自らの分野でも SIA に関する文献を出版してきた（Burdge 1994, Barrow 2000, Becker and Vanclay 2003, Taylor et al. 2004）。その中でもバージ（Burdge）がまとめた SIA の実践的ワークブック（2004）は、専門家に任せられる傾向にあった SIA を、地域住民にも理解し、実践できるものとしたことにより SIA の普及が促進されている。

1970 年代の「バージャー調査」からわずか 30 年程の間に、SIA の理論化および体系化、さらに実践的な SIA 技術の習得を目的としたワークブックの作成やトレーニングセッションの開催などを通して、SIA が確立してきた影にバージやテイラー（Taylor）ベッカー（Becker）や

バンクレイ（Vanclay）などの研究者や SIA 実践者の努力がある。これらの人々が近年、SIA の必要性を事業者や政府関係者に認識させ、さらに SIA を開発事業計画に取り込んでいくという社会変化を主導している。

最近では SIA の中でも、開発事業が先住民族に及ぼす影響に配慮することの重要性が強調されているが、その中心となっているのが世界ダム委員会である。1997 年に世界銀行と国際自然保護連合（IUCN）が大規模ダムの建設に伴って生じる、環境への影響や社会的影響に関して話し合う会議を開催し、その会議を出発点として翌年の 1998 年に南アフリカ政府の代表を議長として世界ダム委員会が発足した。2000 年にはコルチェスター（Colchester 2000）がダム建設と先住民族および少数民族に関する論文を同委員会に提出している。その中で、先住民族の特別な位置づけ、国際法における先住民族と少数民族の権利、土地と領土に関する権利、また自決権などに注意を払うことを喚起している。さらに先住民族および少数民族に及ぼす大型ダムの影響として、いくつかの事例を挙げている。その中には：1）民族抹殺としての移住、2）影響を受ける人々の文化的特長を確認することを怠った場合、3）事前の合意が無かった場合、3）土地と生計の損失による影響を確認することを怠った場合、4）補償を怠った場合と補償が不十分な場合、5）自決権の否定などがあり、ダム建設ともなう先住民族の諸権利、文化伝承、自決権などを尊重することを促している。さらにコルチェスターはそれらの問題の解決方法として：1）影響を受けるコミュニティおよび組織作りの重要性、2）非政府団体などの長期的支援活動の価値、3）国際開発組織の信頼性を高めることなどを挙げ、結論として先住民族と少数民族の独自性と権利を認めることや、テリトリー（領域）の重要性を認めること、交渉の重要性、さらに失われた物を復活させる努力が必要であると締めくくっている。

1970 年代の「バージャー調査」に始まり、30 年の歴史を経て SIA はその有効性を認められながら、方法論においても理論的体系化においても大きく前進してきている。その成果はアメリカ合衆国政府機関が策定した「SIA ガイドライン」さらにバージなどの SIA 専門家がまとめたガイドブックなどに現れている。これらの文献の中で共通して強調されている要素が「住民参加の重要性」である。SIA を有効に実施し、その成果を開発事業計画に生かしているためには、SIA に住民が効果的に参加することが必要であり、このことを強調する研究者は多い（Buchan 2003, Harris et al. 2003）。

3. 二風谷ダム建設と社会的影響に関する調査

開発事業にともない自然環境および地域社会が影響を受けていくという事実は、日本においても変わるわけではなく、その意味において日本における SIA の必要性は今後高まっていくことが予測される。しかし日本での SIA の体系化に向けた試みは、北海道沙流郡平取町に 1997 年に完成された二風谷ダムをめぐってすでに始まっている。二風谷ダム建設が始まる以前である 1975 年に、二風谷ダム建設の影響を予測する SIA がすでに行われていた。この当時の状況を考

えると、この調査は画期的であり、日本における SIA を考える上で貴重な事例である。またこの調査がおこなわれてから 30 年の年月が過ぎた 2004 年に、再び二風谷ダムの社会影響調査が行われた。この調査は後に続く本格的な二風谷ダム建設による社会影響調査のための予備調査であり、また現在行われている平取ダム建設に伴って行われている「アイヌ文化環境保全対策調査」の中で、同地域で建設された別のダムの比較資料となる。ここではこれらの二つの社会影響調査を検証する。

背景

北海道開発局により「沙流川総合開発事業計画」の一環として沙流川流域に二風谷ダムをはじめとする 2 つのダムを建設することが計画された。その第一段階として 1997 年に二風谷ダムが完成し、残るもう一つのダムである平取ダムの建設の着工が 2006 年に予定されている。1970 年代にダム建設計画が発表された当初は、二風谷ダム建設の主たる目的は当時計画されていた苫小牧東部大規模工業団地において必要とされる工業用水の供給のためとされていた。しかし後に状況の変化に伴い、二風谷ダムは洪水調整機能を主とする多目的ダムとして建設された。この混乱は現在に至っても、二風谷ダムに関する議論の中心にある。

二風谷ダム建設の過程で、この地域に先住していたアイヌ民族への影響が深刻になり、ついにダム建設予定地の地権者である 2 人のアイヌ民族の古老が北海道土地収用委員会を提訴した。「二風谷裁判」として知られるこの裁判の判決で、札幌地方裁判所はすでに完成している二風谷ダムの存続を認めつつも、アイヌ民族の先住権および文化享有権を認め、今後、開発事業によってアイヌ文化の伝承が妨げられることのないように、事前の調査が必要であるとした。この判決は 2006 年に着工を予定している平取ダム建設に影響を及ぼし、平取ダム建設による地域のアイヌ文化への影響を調査する作業が、2003 年 4 月より 2005 年までの 3 年計画で、平取町の住民によって行われている。この調査の中で、すでにある二風谷ダムが地域住民の生活にどのような影響を及ぼしているかということを明らかにする必要性が高まり、2004 年には予備調査が行われた。

2003 年には二風谷ダムの治水機能そのものが問われる問題が起きている。2003 年 8 月に、この地域を襲った台風 10 号に伴う集中豪雨により、沙流川流域一帯は大きな被害を被った。北海道開発局は二風谷ダムが集中豪雨の被害を最小限に止めたと説明する一方、治水のためのダムがその機能を果たさなかったと考える住民も多く、再び二風谷ダムをめぐる論争が起きている。特に二風谷ダム下流の沙流川河口付近の住民たちが受けた被害は深刻であり、床上浸水などの被害は二風谷ダムの管理ミスによるものであるとして、住民たちが沙流川を管理する北海道開発局を相手どって、損害賠償を求める訴訟を起こしている。

沙流川に沿って発展してきた流域の町村の歴史の中で、二風谷ダム建設は歴史の大きな節目であったことは明らかである。この開発事業によって引き起こされる地域社会の変化を予測する努力はなされたのだろうか。日本における環境影響評価法の制定までの流れを見ると、1969

年に「国家環境政策法（NEPA）」を制定したアメリカ合衆国に続き、1972年には日本においても公共事業についてアセスメント制度を導入しようとする閣議了解がなされている。つまり二風谷ダム建設計画が出来た時期は、日本において環境影響評価の必要性が議論され始めた時期であり、それが法制化するまでには20年以上の年月を要している。しかし興味深いことに、二風谷ダム建設に伴い、2つのグループが影響評価を行っている。一つは平取町の委託を受けて、環境に及ぼす影響、さらに地域経済、アイヌ文化への影響など多方面に渡ってダム建設の影響評価を行った大学教授たちを中心とした沙流川水資源対策調査団である。もうひとつのグループは北海道開発局であり、その成果を1982年に「沙流川総合開発事業（二風谷ダム・平取ダム）環境影響評価報告」としてまとめている。1982年に北海道開発局が公表したものは社会影響に触れてはいない。一方沙流川水資源対策調査団による調査は、二風谷ダム建設に伴う社会・経済的な影響について分析をしている。

「沙流川水資源問題に関する調査報告書」について

1976年に書かれている「沙流川水資源問題に関する調査報告書」は大学教授と関連研究所の研究員がそれぞれ技術班と社会経済班を構成し、それぞれの分野において二風谷ダム建設による影響を予測し、それに伴う提言をまとめている。報告書の冒頭では、この調査が河川工学と地域経済学の専門家たちの第三者からの客観的な見解を提示することを目的としていると述べ、報告書では以下の7項目について検討している。

- 1) ダム構造、流量計算などの各種資料の検討
- 2) 沙流川流量調査
- 3) ダムによる影響（水温、水質、伏流水、地下水、気象、水没地域）
- 4) 町の将来計画と産業構造
- 5) 将来の水需要量の推計
- 6) ダム建設に対する住民意向調査
- 7) その他の関連事項の調査

この調査が行われた当時は二風谷ダム建設は苫小牧東部大規模工業団地の工業用水の供給を第一目的としていたことから、調査団はその事を前提とした調査を行い、「沙流川推計の水資源を苫小牧東部大規模工業団地に供給することによって、平取町はいかなる影響をうかるか（社会経済班）」、さらに「ダム建設に伴って予想される問題の洗い出し（技術班）」の2つの問題を取り上げている。

調査団の報告書では、第一に沙流川の水資源と日高山系の森林機能が平取町の発展に深く関わっていることに注目し、「水が農山村にとって母であるならば、森林はその父である（1976：6）」とし、ダム建設において、その水資源と森林機能の均衡を維持することの重要性を指摘している。その上で平取町の対応姿勢として、次の13項目の提言をしている。

- 1) 地元住民との話し合いによる相互理解の場を設けること、

- 2) 地域の自然環境の変貌をもたらす要素を明らかにすること,
 - 3) 森林機能への影響を明らかにして, 自然の保水力と洪水調整機能に与える変化を予測すること,
 - 4) 用水の農業利用を優先的にを行うこと,
 - 5) ダム用水は4-5月に水温が最も低下することから, 水温低下による被害補償を補償すること,
 - 6) ダム用水の受益者(報告書の中では苦東と明記している)は危険を負担する水源地域の振興や水源潤養の費用を一部負担するべきである,
 - 7) 水利用は有限であり, 貴重であり, 用水の合理的な利用を行うこと,
 - 8) 水質の汚濁を防止するために環境基準を設定して汚濁発生源の規制をとりきめること,
 - 9) ダム周辺の損害を受ける民家に対して, 事前交渉により補償を取り決めること,
 - 10) ダムにより経済的, 心理的, 環境上の緒問題に対して, 住民の意見を取り入れて計画に反省させること,
 - 11) 治水と利水の競合, あるいは治水上, 地元と下流の競合が発生した場合は地元の防災を優先すること
 - 12) ダムにより不利益が生じた場合は, それらの改善および補償を保障すること
 - 13) 以上の諸条件を満たした上で, 住民の賛否をとりつけ, 平取町の姿勢を決定すること
- 調査団は沙流川流域を3つの地域に分類し, 第一に荷負までの流と上流の振内地区, 第二に支流額平川の流域の貫気別地区, さらに第三に二風谷から紫雲古津の水田地帯の平取地区とし, それぞれの地域的特徴を分析し, さらにダムのよる影響の予測を提示している。振内地区に関しては以下のような変化を予測している。

二風谷ダムが出来た場合, この地域はダム上流に位置するため, 全体としてはあまり影響はないと考えられており, ダム問題が話題にのぼるという状況はみられない。ただ長知内部落は現在の60haの水田のうち, 40haが水没することになり, 部落の存立基盤は奪われるという危機感をもってるが, 部落での話し合いはまだ行われていない。

(1976:100)

貫気別地区については平取ダム建設を前提とした分析であり, 以下のように書かれている。

……平取ダムが建設された場合, 町営牧場の水没による肉牛飼養条件の悪化ということの他に, ①河床低下によるポンプ揚水の困難, ②水温の低下という開田との関係で不安を訴える声が聞かれた。

(1976:101)

平取地区は水田地帯を主体とし、酪農、畜産地帯を含む地域であり、またダムの影響はこの地域にもっとも深刻であることを予測している。

現在でも砂利採取による河床低下の影響が出ており、ダム建設、工業用水の取水で、果たして農業用水が確保できるかという不安はどの農家にも強く、目下の最大関心事となっており、さまざまな動きが見られる。したがって、ダム建設と農業用水の関係については、この平取地区、水利のうえでは沙流土地改良区について、詳しく検討を加える必要がある。

(1976：103)

報告書では平取町における各産業の現状分析に多くの紙面を費やし、稲作を初めとする農業全体の特徴、林業の現況と問題点、商業の現状と問題点、工業の現状と問題点について報告している。また分析は平取町の財政にもおよび、ダム建設に伴って期待される固定資産税の収入増や工事関係者が増える工事期間中の町民税の収入増もさほどではなく、ダム建設が平取町財政に有利にならないと分析している。さらにアイヌ民族の状況と文化保存運動に関しては、詳細な資料分析を行った上で具体的な提言をしている。その中でアイヌの人々が平取町の中で、社会的、経済的に大きな位置を占めていることや、その文化保存運動が活発であることなどに触れ、以下のように述べている。

アイヌ文化保存運動が、伝承文化や民具の収集だけでなく、自分たちの生活そのものを見つめなおす地域認識運動に発展していると評価できるし、新しい再認識された共同体社会が形成されつつあるとみられるものではなかろうか。

(1976：159)

さらにアイヌ文化保存運動は地域自治体の援助のもとで全町民的な運動に発展させる必要があるとまとめている。

第7章の「ダム計画にともなう緒問題」では、関係機関から重要な資料が提出されないことから、詳細な検討ができないと前置きして、限られた資料と聞き取り調査なので明らかになった事柄をもとに分析している。二風谷ダムの主目的は治水であるか利水であるかの疑問を提示した上で、二風谷ダムの構造や貯水量、取水量などに関する分析、堆砂に関する問題点、ダム建設が及ぼす自然への影響などを分析し、二風谷ダム建設が治水を目的としてものであるとすれば、その治水能力は地域住民の安全を確保するには不十分であること。また同ダムが苫小牧大規模工業団地への工業用水の供給を目的として建設されとした場合、地域農業の振興に不可欠な農業用水への影響が懸念されることを指摘している。さらに二風谷ダムの建設にともない、排砂計画の必要性や諸問題への対応などを求めている。また他のダム建設の事例から、二

風谷ダム建設に伴い貯水池周辺の気温の変化、風力の変化などが起きることが予想されることから、農作物への影響を指摘している。また貯水池周辺において地すべりが起こりやすい状態になることを警告している。

報告書ではダム建設により水没する地域への影響を独自の項目として取り上げ、平取ダムの建設によって水没する豊糠地区と二風谷ダム建設によって水没する二風谷地区において起こると予測される問題を分析している。豊糠地区については、地域の自治会や青年団、婦人会、PTAなどの地域組織の活動が活発であるなどの現況を検証した上で、ダム問題については以下のよう

ダム問題については何度か話し合いがもたれ、水没、排水没にかかわらずダム建設反対の態度で一本化している。その理由は第一に、もともと多くない土地がさらにダムによって削られることは豊糠の農業発展にとって致命的打撃になること。第二は学校が水没し、さらに家屋が水没する六戸が部落を出ざるおえないことになることと生活単位としての部落が成り立たなくなること、第三にダムによって気象が変化するおそれがあること、第四に町営牧場の水没により、肉牛、乳牛の夏季放牧が困難になることである。

(1976：229)

二風谷ダムにより179haが水没することになる二風谷地区における問題は複雑であるとし、農家が抱える負債や補償金への期待感、またアイヌの人々にとって水没する右岸の土地は自給水田であり、また山菜の供給地であること、さらにこれらの人々は給与地としてのこの土地に対して特別な感情を抱いていることを指摘している。

ダム問題に対する二風谷住民の反応はきわめて微妙なものであり、したがってこの問題に対する部落の統一した態度は形成されていない。むしろダム計画が強行されることになれば、部落の世論は大きく二分されることになろうアイヌの人々（原文ではアイヌ系住民）の手による文化運動、地域認識運動が進められ、アイヌ文化の掘り起こしとその新しい創造の中心地として二風谷部落は重要な位置が定まりつつある時、部落を分裂させ、その最大の農業基盤を水没させることによって失われるものはあまりにも大きく、それはきわめて危険な選択であるといわざるを得ない。

(1976：232-233)

報告書の最後は、その当時すでに河川改修や砂利採取作業などにより資源の減少が懸念されていたシシャモ資源につて、二風谷ダム建設によって起きる変化がシシャモ資源へ好ましくない影響を与える可能性があることを警告している。

沙流川水資源対策調査団が行った二風谷ダムの建設に関する社会・経済的影響調査の結果が

どのように影響緩和策に反映されたのか、またどのような対策がとられたのかについては、それに触れた資料はない。しかしこの調査に参加した大沼盛男、池田均、小田清などが編集した『地域開発政策の課題』（1983年）の中で、二風谷ダムに関する調査の概要およびその意義が分析されている。「苫小牧東部開発と沙流側水地現調査」と題する章では、調査の概要を紹介した後、調査の意義を3つに分けて説明している。第一に地域計画が地域住民や自治体の主導ではなく、国や都道府県が主導していることから、現状は市町村の自治体としての自治権が奪われているのではないかという問題提起をしたことである。第二に研究者が地域開発の問題に関わる場合、計画を主導している国や都道府県に無批判に協力するのではなく、地域住民の視点に立った調査が重要であり、また学際的な研究体制を取ることで、高水準の研究が可能になること。第三に住民や自治体からの生存をかけた問題提起にこそ、科学研究の先端的課題が示されているとしている。

二風谷ダムの社会影響に対する住民意識の調査について

1997年に二風谷ダムが完成し、その後札幌地方裁判所において「二風谷ダム判決」が下され、その数年の後に、沙流川総合開発事業は第二のダムである「平取ダム」の建設のための作業に着手した。河川法改正や環境影響評価法の制定など、近年大規模開発事業を取り巻く法的条件は変化している。また「二風谷ダム判決」を受けて、北海道開発局は平取ダム建設が地域のアイヌ文化に及ぼすであろう影響を事前に予測し、それに対応するために、平取町へそのための調査を委託した。2003年から地元住民の手で3年計画の「アイヌ文化環境保全対策調査」が行われている。平取町にすでに建設されている二風谷ダムが地域住民の生活にどのような影響を及ぼしたかを明らかにすることは、2006年に着工する予定である平取ダムの影響評価に重要な要因であることから、地域では二風谷ダム建設による社会影響調査を行う必要性が語られてきた。二風谷ダムの影響評価を明らかにすることは平取ダムを含めた「沙流川流域総合開発計画」の影響評価、それによって影響をうける地域振興にとって重要であることから、2004年11月以来、今後の影響評価作業計画のための予備調査が行われた。

2005年11月に北海道大学大学院文学研究科地域システム科学講座の宮内泰介研究室（社会学）、同行動システム科学講座の大沼進研究室（社会心理学）、北海学園大学大学院文学研究科の岩崎研究室（文化人類学）との共同研究として、「二風谷ダムによる社会影響に対する住民意識の調査」が計画された。その目的はダムの是非を問うものではなく、ダム建設による社会的な影響を考える際に、どのような側面に目を向ける必要があるかを、できるだけ多様な視点から把握することである。

調査方法

事前の聞き取り調査の結果、沙流川流域を3地域に分け、沙流川上流域の人々、二風谷ダム近郊の人々、沙流川下流域の人々中で、地域に長く住み二風谷ダム建設前と後の変化を体験し

ている人々、つまりキー・インフォーマントとして17名を選び出した。キー・インフォーマントの選出の基準として沙流川流域の各地域に住む人を選ぶという条件の他に、農業、漁業、畜産業など、各産業に関わる人から聞きとりをする事を条件とした。その中で、入院中などの理由で聞きとりが出来なかった人を除いて14名の協力を得て聞き取りを始め、後にそれらの人々から得た情報からさらに6名の聞き取り調査を行い、合計20名（男性14名、女性6名）から各1時間の聞き取りを行った。聞き取りでは二風谷ダムに関わる体験に限定せずに、沙流川流域に住んでいることに関わる体験を全般的に聞き、その中でも二風谷ダムが出来た前と後の生活体験を対比的に話してもらった。

聞き取りの様子を録音したテープを書き下ろし、その生のデータの中から、「二風谷ダムが出来たことによる変化としてあげられた事柄」を抜き出して一覧表を作った。この場合、同一の人が多数の事柄について語っている場合はそれらの全てを書き上げたが、同一の人が一つの事柄について繰り返し語っている場合はそれを一度とみなした。また多数の人が同様の事柄について語っている場合は、「複数」と記入した。この段階で「二風谷ダムが出来たことによる変化としてあげられた事柄」は178種類を数えた。

その後一覧表にあげられている事柄の内容に注目し、同様の主題と見られるものをまとめて一つの項目として分類していった。その結果、二風谷ダムの影響として地域の人々が多く挙げる事柄は16の項目に分けられた。付録3には16の項目に当てはまる具体的な事柄の中で主だったものを明記したが、インフォーマントの性別や年齢は調査の目的に不必要であることから、また個人を特定するデータとなりうることから削除したが、インフォーマントが住む地域は重要なデータであることから、それを含めてまとめた。今後、さらなる社会影響評価調査をデザインするうえで、予備調査で得られたデータは重要であることから、本稿では付録3にこのデータの概要を提示し、ここでは16の項目の中でそれぞれ特徴的と思われる事柄を分析する。

聞き取りから得られたデータを分類していく過程で、同様の趣旨で語られている事柄をまとめたところ、以下の16の項目に分けることが出来た：1) 変化が見られない、2) 改善された、3) 経済的効果の有無について、4) 二風谷ダムの理解について、5) ダム工事の様子について、6) ダムと水害について、7) ダムとシカの関わりで見られる変化について、8) ダムと気候の変化について、9) 景観への影響について、10) 山菜への影響について、11) 沙流川の昔と今の変化について、12) 沙流川の魚に見られる変化について、13) 開発局（管理棟）に対する意見について、14) 2003年の台風10号による被害について、15) 土地収用について、16) 農業・漁業への影響について。

これらの16の項目の中で、最も意見が少なかったのは1)と2)であり、ダムが出来たことによる生活への影響は見られないと考える人、生活が改善されたと考える人が全体的に少ない。つまり多くの人が地域住民の生活に何らかの変化があると考えているが、それらの変化は「生活が改善された」という意識に結びついていない人は少ないことが明らかである。この傾向は3)

の二風谷ダム建設による経済的効果の有無について、さらに5)のダム工事中の様子に関する意見も同様であり、ダム建設によって雇用が生まれ、それが地域の経済的効果に結びついたと考える人たちは少数であり、多くの人はダム建設中の雇用はあったものの、それがその後の地域経済の活性には結びつかなかったと感じていることが解る。またダム工事中の様子として、工事の進行に伴いしだいに沙流川の景観が崩れていることを目の当たりにした地域の人々の困惑などが語られた。

4)と13)には二風谷ダム建設および管理に携わる事業者に対する住民の意識が表れている。二風谷ダム建設に関わった人々への思いや、目だった反対意見が無いことを指摘する人たち、また地域住民の無関心、理解の不足、ダム建設批判など、二風谷ダムに対する地域住民の意識が幅拾いと言える。しかし13)のダムの管理方法に対する意見の中には、不信感や不満が多く表れていることが特徴的である。この中で、ダム建設が地域のアイヌ文化へ影響を与えると考えた意見があったことは、この地域の歴史的特徴を現している。

二風谷ダムの治水機能について答えている6)ダムと水害について、さらに14)台風10号による被害では、ダムが災害を最小限に食い止めたと考える少数意見に対して、多くの人がダムに対する信頼性を疑う意見を持っていることが明らかである。特に台風による被害を経験したことにより、ダムに対する意識が変わったとする意見が複数あった。

16の項目の中で、特に多くの人々が同様の意識を抱いていることが予測できるのは11)と12)の沙流川に関わる体験と、それが失われた事に対する失望感である。沙流川流域の全域に渡って聞かれた意見として「沙流川は昔は子供が泳げるほどきれいで、魚も取って食べることができたが、今は川の水が濁ってしまっている。」があげられる。11)と12)にはこのような意見が異なった表現でくり返し語られていることが特徴的である。その他、二風谷ダム建設によって引き起こされた変化としてシカの生態の変化、気候の変化、景観の変化、さらに山菜などの地域の人々の生活に深く結びついた食文化への変化や、地域経済の基盤である農業や漁業への影響を懸念する声があげられている。これらの詳細について今後、さらなる調査を行う必要がある。

2003年に沙流川流域一帯を襲った台風10号により、調査地域は大雨の被害を受けたことから、聞き取りの中ではその当時の被害を描写するだけに留まらず、二風谷ダムと台風被害を関連づけて話す人が多くいた。その中には二風谷ダムが治水機能を果たしたと考える人、またダムが出来れば大雨による水害の問題は解消されると考えていたが、その期待が裏切られたと考える人などが見られた。

今後の課題

二風谷ダム建設による影響を今後、どのようにモニターしていくかという課題は、将来に予定されている平取ダムの影響とともに重要な課題である。1976年の社会調査と2004年の予備調査から得られたデータをもとに、沙流川流域におけるダム建設の社会的影響を継続的にモニ

ターするシステムを構築することは急務であり、その検討のためにこれまでの聞き取り調査に加えて、必要と思われる検討事項を挙げる。

第一に二風谷ダムが出来たことによる変化としてあげられた事柄として、平取町における経済面の変化があげられる。この変化は就業者の推移や平取町の財政上の変化や一般的な人口の推移などに現れてくるばかりでなく、沙流川の水質の変化や河川環境の変化の影響を受ける農業や漁業や林業、観光産業などの地域産業の将来に影響を及ぼす。それゆえに、今後も聞き取り調査を継続すると同時に、平取町における経済的指標となる統計資料の分析を行い、二風谷ダム建設が地域経済にどのような影響を与えたかを明らかにする必要がある。

第二に多くの人が沙流川の景観や川との関わり方が変化したことを指摘している。このことが長期的に地域住民の生活にどのような影響を及ぼすかについて引き続き聞き取り調査を行い、特に地域の子供たちの生活の変化を明らかにする必要がある。さらに沙流川の景観や川と地域住民の深い関わりを再生する方法、また二風谷ダム建設でのこれらの経験を平取ダム建設に活かす方法について検討する必要がある。

第三に 1976 年と 2004 年の両方の調査において、二風谷ダム建設と地域のアイヌ文化伝承が関わりを持っていることが指摘されている。また地域の食文化に深く関わっている山菜への影響についても今後聞き取りを続け、二風谷ダム建設以降の具体的な変化についてさらに聞き取りを続け、現在平取ダム建設へ向けた調査として行われている「アイヌ文化環境保全対策調査」に活かすことが望ましい。

二風谷ダムの治水機能について疑問を投げかねる意見が聞かれたが、この問題や気候の変化やシカの生態の変化について、聞き取り調査に加えて、科学的な調査および議論が必要だと思われる。また二風谷ダムの建設および管理に関する情報が地域に適切に流れているかどうかについても、聞き取り調査に加えて、関係機関の広報活動の現状を調査する必要がある。

二風谷ダム建設に伴う社会影響を明らかにするためには、上記のような個々の課題を二風谷ダムに限定的に捕らえるミクロな視点の他に、本報告の冒頭で述べたこれまでの多くの事例から構築されてきた SIA の手法というマクロな視点で検討する必要がある。そのために付録 1 にある「社会的影響アセスメントの調査項目」に照らして、この調査の今後の課題を考えてみる。5 つの項目：1) 地域に住む人々の人口分布にどのような変化起きたか、2) 地域の社会構造にどのような変化が起きたか、3) 地域の政治的構造にどのような変化が起きたか、4) 個人や家族に日々の生活にどのような変化が起きたか、5) 自然資源や歴史的・文化的な資源の利用にどのような変化が起きたかについて、再度問い直すと、二風谷ダムが地域住民にもたらした変化は、個人や家族の日々の生活の上、さらに自然資源や歴史的・文化的な資源の利用にもっとも顕著に現れていることが解る。ダム建設によって起きるリスクは住民個人に及んでいること、さらに 5) の資源利用の変化は、沙流川との関わりにおける変化を平取町全域の住民が感じていることなどに注目し、今後の課題とする必要があるのではないか。

謝辞

「二風谷ダムにより社会影響に対する住民意識の調査」に協力を頂いた北海道大学大学院の宮内泰介先生、大沼進先生、さらに研究室の大学院生の皆さんに感謝申し上げます。さらに地域の生活者として、二風谷ダムに関する体験をお話し頂いた皆様に感謝申し上げます。

付録 1：社会的影響アセスメントの調査項目

- 1) 人口に見られる特徴：現在の人口と予測する変化，民族・人種的多様性，一時的・季節的な住民の移入および移出
- 2) コミュニティーや組織の構成：地元の政府機関のサイズや組織，中央政府との関連，雇用パターン（過去・現在），任意団体，宗教組織，さらにそれらがどのように関わっているか。
- 3) 政治的，社会的資源：地域において政治的権力やリーダーシップなどがどのように配分されているか。
- 4) 個人や家族における変化：個人や家族の毎日の生活に影響を与える要因など。例えば考え方や家族の特質，友人関係などや，リスクや健康，安全をどのように捉えているかという点における変化など。
- 5) コミュニティー・リソース：自然資源や土地利用，住宅の利用や健康や警察，消防や衛生施設などの公的サービスなどを指す。コミュニティが存続し続けるためには，歴史的・文化的資源が重要であり，この中には先住民文化や宗教集団などに及ぼす影響も考慮される。

付録 2

- ① 一般住民の参加：計画の初期から，プロジェクトによって影響を受ける全ての住民を明らかにし，それらの人々を社会的影響調査に参加させる調査計画を立てる。
- ② 代替手段，その可能性や範囲を知る：予定されているプロジェクトや政策の変更，代替手段に関して十分な説明を受け，社会的影響評価の作業を計画するために必要なデータを得る。
- ③ 「ベースライン」と呼ばれる基準となる現状の把握：影響を受ける人間環境の現状を把握し，ベースライン（現状基準）を明らかにする。
- ④ スコーピング：プロジェクトの技術面を理解した後，影響を受けると思われる人々に聞き取り調査を行った上で想定できる全ての社会的影響を確認する。
- ⑤ 予測されている影響の推定：

影響を推定するために必要な情報は 5 種類ある：1) プロジェクトの実施機関が提供するデータ，2) 同様な事業の経験や記録の文献やレポート，3) 国勢調査などの統計，4) 二次的な資料や文献，5) 聞き取りやヒヤリング，アンケートなどの調査結果など。

予測される影響を推定するには，おもに 7 つの方法がある。：1) 比較方法，2) 現在の傾向がそのまま継続すると考えて推定する方法，3) 人口の増加が予測される場合，それに比して雇用や住居の増加などを予測する方法，4) 明らかな事実から将来を推定してシナリオを考えたり，また過去に同様なケースがあれば，そのケースに地域的特質を加味して将来を推定する方法，5) 専門家の考えるシナリオを土台として推定する方法，6) コンピューターを使い，数学的理論を用いて推定する方法，7) ダム建設などの場合は，建設により川の利用が出来なくなったり，農業が出来なくなるなど「失われる物」を明らかにして影響を推定する方法
- ⑥ 影響に対する反応を予測し，社会的影響の重要性を指摘：この予測は困難であり，行われなくても多いが，実際，なんらかの影響が起きるとき，それに対応するためにとる行動から，連鎖的な影響が起きる。それを予測しておく必要がある。

- ⑦ 直接の影響の他に、間接的な影響や時間が経つにつれて増加する影響があり、それらを把握しておくことは重要である。
- ⑧ 新しい代替手段やすでにある代替手段に変更を加えて、それを提示し、その結果を予測する。この場合も5番目に示した5つの方法からいずれかを用いて、また専門家の意見を聞きつつ、代替方法を提示する。
- ⑨ 影響を緩和するために「影響軽減計画」を立てる。社会的影響調査では単に影響を予測するだけにとどまらず、その影響をどのような緩和することが出来るかを考えることが重要である。影響を緩和するためには、計画を変更したり、影響を緩和するためには代わりの施設や資源や機会を用意したり、そのための補償金を受けるなどの方法がある。
- ⑩ モニター・プログラムを作成する。開発事業が計画の通りに行われているか、また予定から逸脱したり、それにより予期しなかった影響が発生する場合に、それらを確認するために、モニター・プログラムを作る。

付録3

二風谷ダムが出来たことによる変化としてあげられた主な事柄：

- 1) 変化がみられない。
 - 生活は変わらない (本町)
 - 今はお米だけを栽培しているが、ダムが出来る前と出来てかは、大して変わらない (紫雲古津)
- 2) 改善された。
 - ダムができてから、地域の人に安心感がある (本町)
 - ダムが出来て、農業用水がこっちまでくるようになった (本町)
 - ダムがあったから、ここの水田は水没しなかった。この地区は台風の影響は少なかったのはダムのおかげ (去場)
- 3) 経済効果の有無について
 - ダムによって仕事が出来たことは良い (二風谷) *複数
 - ダムができれば観光客も増えるといっていたが、増えるどころか減る一方 (二風谷) *複数
 - 工事に伴って働きに来る人が増えれば消費が増える効果を期待する声があったがあまり関係なかった (去場)
- 4) 二風谷ダムへの理解について
 - ダムはそこで働いた人たちが作ったものだから、誇りに思う (二風谷)
 - 二風谷ダムのことを始めて聞いて、良いか悪いか分からなかった (二風谷) (紫雲古津) (去場) *複数
 - ダムは本当に地域住民のためになっているのかと疑問 (紫雲古津) (本町) (荷負)
 - ダムについてダメだと言う人はいない (本町) *複数
 - ダムについては、水害は最小限にできます。水害防止できる (紫雲古津) (本町)
 - 上の人が決めるっていうか……結局やるって決めたら、住民がよほど団結してそんなの必要ないと言わないと、やっちゃいますよ (本町)
 - 発電にも使っているそうだが、発電量は3000 kWで、一般家庭1000戸分しか発電できない。果たしてそれが本当に必要なのか？ (二風谷)
 - 砂利の蓄積が多く、もう1つダムが出来ないと意味がない (本町)
 - 当時はダムに反対する知識・意識はなかったが、今にして思えば、一人でも反対の声を上げていれば良かったと思う (二風谷)

- 直接的にはダムの影響はないが、ためしに灌水するとき、あの時はちょっと怖かった(荷負)
 - ちゃんとした道路を切り替えでもって、ずいぶん壊された(荷負)
 - ダムとアイヌ文化の関係、アイヌ文化が破壊されるっていうことを説明しても、地域の人たちはわからなかった(二風谷)
- 5) ダム工事の様子について
- 工事中は、どこにでも人がいて、仕事の半分くらいは地元の人が働いていた。出稼ぎに行かなくても良かった(二風谷)(本町) * 重複
 - 水田にもほとんど影響がなかった(本町)
 - あまり意識しないうちにダムが出来ていた(本町)(二風谷)
 - ダム建設の要員はほとんどが他から来た人たちで、地元からの雇用はわずか2〜3人程度だった(二風谷)
 - 地元の業者も少しはダム工事に参加することもあったが、本当に微々たるものだった(二風谷)
 - 工事が始まって、あの素晴らしい景色がみるみる取り崩されていったことは忘れない(二風谷)
 - 今の世代の子供たちの故郷の景色は、ダムのある風景しかない考えると悲しい(二風谷)
 - ダムがどんどん出来上がっていくうちに、ダムに反対する気持ちがだんだん強くなっていった(二風谷)
- 6) ダムと水害について
- 水害の被害がでやすくなった(二風谷)(富川)(本町) * 複数
 - ダムが崩れたらという不安はいつもある(二風谷)
 - 私の田んぼは一番低いから、水害を受けやすい(紫雲古津) * 複数
 - あのダムがあるから安全だって訳ではない(本町)
 - 普段の川の水量は変わらないが、川が澄むことがなく、少しの雨で濁る(本町) * 複数
 - ダムの急な放水で水が一気に増える(本町)
 - ダムの完成前はずっと大きな水害があった。ただし、築堤の完成以後には洪水はなかった(二風谷)
- 7) ダムとシカの関わりに見られる変化について
- ダムの奥がシカの保護区になっているので、シカの数が増え、生態系が崩れている(二風谷)(本町)
 - ダムは凍ると、何十頭というシカたちが通る。シカと車の衝突事故が多い(二風谷)
- 8) ダムと気候の変化について
- 霜の降りが遅いときは農業に良いが、馬の飼育には霜は関係ない(二風谷)
 - 霜が遅くなって、農業には良い(本町)
 - 昔は氷が張ってスケートもしていた。今は川が凍らない(富川(本町)) * 複数
 - 温泉の裏の畑の付近は3度くらい下がった。ダムから吹き上げる風で、冷たい風が強く吹く。もとはそこにとうきびを植えていたけど、2〜3年やって止めた(二風谷)
- 9) 景観への影響について
- ダムが出来て景観が悪くなった(本町) * 複数
 - 堤防内の敷地も景観が悪い(本町)
 - ダムの両側にナツメ(?)が生えて、そこにゴミが引っかかる(本町)
 - 住んでいるとダムのある景色に慣れちゃいます(本町)
 - ダムは景色を次々に崩して行った。子供たちはそのダムの風景の故郷しか知らない(二風谷)

10) 山菜への影響について

- 山菜やきのこなどは昔は結構採りに行っていたが、今は行きづらくなった（二風谷）＊複数
- ダムが出来てから、山菜の様子は、湿地に適した植物は大丈夫だけど、乾燥を好む植物（すずらん）とかはダメ（紫雲古津）
- 川向は土地が肥えていて、こっちより温暖で、山菜は時期がずれて次々に色々な種類が採れた（二風谷）（紫雲古津）
- 子供たちは二風谷小学校で先生と一緒に山菜採りに行っていたが、ダムが出来た今は、このようなことを経験するのが難しくなっている（二風谷）
- おばあちゃんはダムが出来てから、山菜採りに対岸に行くが、車が入れるからいろんな地域の人たちが来て乱獲して、おばあちゃんたちはあまり採れなくなった（二風谷）

11) 沙流川の昔と今について

- 沙流川は昔は子供が泳げるほどきれいで、魚もとって食べることができた（紫雲古津）（二風谷）（本町）（紫雲古津）（富川）（二風谷）＊多数重複
- 沙流川の水は、昔は澄んでいたが、今は濁っている（紫雲古津）（二風谷）（本町）（紫雲古津）（富川）（去場）（二風谷）＊多数重複
- きれいな川に戻してほしい（紫雲古津）（富川）（二風谷）＊多数重複
- 川は死んだのかな（紫雲古津）
- 川に泥が多く、石がぬるぬるして、ヘドロで滑る（本町）＊複数
- ダムが出来てから川にはいかない（二風谷）
- 濁った水が牧草に上がって、それを家畜に食べさせるから、決していい状態ではない（本町）
- 遊泳禁止になってからでも、子供たちをつれて泳ぎにいった（二風谷）
- 沙流川で育った世代に人たちにとって、沙流川は命の川（二風谷）
- 「よどみ」がなくなった（本町）
- 製材工場が3軒あり、山奥で木を伐採し川に流して運んでいた（本町）
- 秋の終わり（9月20日くらい）まで、丸太に乗って川を往来する仕事をしていた（二風谷）
- 父親の時代は、まだ仔熊を飼う習慣が残っていて、人の乳を飲ませ、川で一緒に泳いだりした（二風谷）
- 沙流川のポロモイチャシ（城）が泳ぎ場だった。壊されるとは思わなかった。ダム造るために地元の了解もなしに壊してしまった（二風谷）
- 自然な川から人工的な川になってしまった。それと同時に遊歩道ができ、散歩コースができたことで、歩くには便利になって嬉しかった（二風谷）
- ここを訪れた親戚や知り合いに積極的にダムを紹介する気にはならない（二風谷）

12) 沙流川の魚に見られる変化について

- ししゃも・えび・ドジョウなどが沙流川にはいたが、今ではとれなくなった（紫雲古津）（二風谷）（本町）（紫雲古津）（二風谷）＊多数重複
- 昔はサケの方から人の庭（川の支流）に迷い込んできてくれていた（二風谷）
- サケが皮膚病のようにになっている。きれいな水が流れていないから（本町）
- 下流のほうは魚が減っている。ダムの底の冷たい水（7℃〜）しかでていかず、酸欠状態の水が流れるので魚たちがボケる（二風谷）
- ダムでドジョウが異常発生した。上流からの栄養素が溜まるせいだ（二風谷）
- ダムに魚道がありシャケはそこを上ることができると（開発局の担当者は）いうが、いったいどれくらい海に帰れているのか（一匹も帰れていないだろう）。（二風谷）
- 警察もあまりうるさくなかった。秋味（秋鮭）は身内が釣ったのを分けてもらっていた（二

風谷)

——サケの溯上が減った。サケはアイヌの伝統儀式に必要。(本町)

——船に乗って、川を行ったり来たりした。(富川)

13) 開発局（管理棟）に対する意見について

——台風の時、避難勧告が行きとどかなかった（二風谷）

——ダムの管理について、地域のひとは不信感を持っている（二風谷）（本町）*複数

——6・7年前に管理のところへ行ったが、放水に関する質問に十分答えてくれなかった（紫雲古津）

——ダムの中の土砂をださないと、水が濁ったまま（二風谷）

——ダムが出来たことを悪いという人はいないが、水調整をして安定させないと、生活の小さなこと、生活の中で気になることが残されていくことは事実（本町）

——ダムの管理者は気をつけてもらわないと。去年の水（台風による）でてから、水が多くなったら気になって、ダムまで走り出す（本町）

——去年の水害はダムがあったから、被害は最小限にすんだというが、そうかな？（紫雲古津）

——洪水から住民たちを守る、住民たちの安全のためにダムがあるんじゃないくて、ダムを守っている人たちがダムの安全のために水を貯水していると思う（二風谷）

——真剣にやって、昔のもののきれいな状態に戻してもらいたい（紫雲古津）

——そもそも沙流側流域は崩れやすくダム建設に向かない、という専門家の調査がある（二風谷）

——500億かかるダム費用を、町にまわしてくれればいいのに。もともと自立できる村。人手を山の保全に回せる（二風谷）

——ダムの堤体の上を一般車両は通行できないため、大変不便。(所有している)川向いの山の斜面を維持管理しにも行けない（二風谷）

14) 2003年の台風による被害について

——下流では深刻（紫雲古津）（二風谷）*重複

——ダムに近いところでは3ヘクタールほど、水に漬かったが、収穫には影響はなかった（二風谷）

——ダムは泥で埋まっているらしい。もうダムの役目を果たしていない（二風谷）（本町）*複数

——台風の被害を見て、ダムに対する意識が変わった（二風谷）*複数

——自分の住んでいる地域は直接の被害はなかったが、上流の方の被害が大きかった。山や川がえぐられ、木が倒れるなどの被害が起きた（二風谷）

——台風で決壊しそうになった。災害を防ぐはずのダムが役目を果たさなかった（二風谷）

——車庫の上まで洪水がきた（富川）

——トマトに水を送るためにつくったのにトマトがだめになった。ビニールハウスは泥だらけになった（富川）

——皮肉にも開発（ダム事務所の職員）が下手だったから助かった。洪水時、溜水がピークにきている一番危ないときに放流した。だがゲートに流木が引っかかってあまり水が出なかった。でいたら被害が大きかった（富川）

——去年：電動ポンプが間に合わず家までは来ないが、庭まで水が来る（夜に自主避難）（本町）

——「ダムに水がたまったから下流のほうが助かった」とは言うがおっかなかった。（本町）

——事前に家畜なども避難させていたため、被害は少なかった（二風谷）

——ダムのおかげで、下流の被害もおさえられた（二風谷）

——川の水は1年以上にごっていた（昭和38年は2ヶ月程度）（二風谷）

——他地域と比較して復旧作業・費用が軽く済んだ。（本町）

15) 土地収用について

- 土地を売ってダムに沈むって分かっていても、売れるのだから、新しい場所へ移るほうが幸せだと思う人もいるかもしれない（二風谷）
- ダム建設以前に買い上げなければならなかった土地が、今も堤防の敷地内に残っている。役場も開発もなかなか動かない（本町）
- 貧しい村だったので、用地買収が楽だったのだろう（二風谷）
- 川向の土地に農協が築堤・農道橋を作り、交換分合を進め、機械化を奨励したため、個人の借金が増えた。農協の借金ねはダムが出来なかった返せなかっただろう（二風谷）
- 協議会に出席するのは主に該当する土地の大きい人たちで、土地の小さい人たちはあまり関心がなかった（二風谷）
- 平取町長の許可を得て、陳情書（あとで内容がよくないと口頭で言うことになった）を持ち、離農補償の値段の交渉のために中央へいった。結果、1反あたり20万上がることに（ $180 + 20 = 200$ 万）。しかし、この働きに対する受益者からの感謝の言葉はなかった。（二風谷）
- ダムに売っちゃってどっかに引っ越せば、3000万円の補償が出るから、それ目当てで札幌へ移った人もいたと思う。自分たちもそうしたいと思ったが、ここから出るのには躊躇した（二風谷）

16) 農業・漁業への影響について

- ダムができたために米の味が落ちたことが言われている。水も汚れてきたことが言われている、さらにまづくなってしまった（去場）
- 今年は田んぼの水までくさい。田んぼの水路の水がドブくさい。だからここで育つ稲はどうなのかなって不安です（二風谷）
- 田んぼの水供給は関係ない。ダムがなくてもあまるだけの水があった（二風谷）
- （河口付近の）浜で昆布がダメになった（富川）
- 砂防の影響でアワビ・魚が取れなくなった（富川）

文献一覧

- Barrow, C. J. 2000. *Social Impact Assessment: An Introduction*. London: Arnold
- Becker, Henk A and Frank Vaclay. 2003. *The International Handbook of Social Impact Assessment: Conceptual and Methodological Advances*. Cheltenham: Edward Elgar Publishing Company
- Berger, Thomas, R. 1977. *Northern Frontier Northern Homeland*. Vancouver: Dougals & McIntyre
- Buchan, Dianne. 2003 Involving Communities. *Impact Assessment and Project Appraisal Vol.21: 168-172*
- Burdge, Rabel J. 1994. *A Conceptual Approach to Social Impact Assessment*. Middleton: Social Ecology Press.
- 2004. *A Community Guide to Social Impact Assessment*. Middleton: Social Ecology Press.
- 中信地区・廃棄物処理施設検討委員会 2003 長野県中信地区・廃棄物処理施設検討委員会報告書
- Colchester, Marcus. 2000. Dams, Indigenous People and Vulnerable Ethnic Minorities, Thematic Review V.1.2 prepared as an input to the World Commission on Dams, Cape Towns, www.dams.org

- Guidelines and Principles for Social Impact Assessment prepared by The Interorganizational Committee on Guidelines and Principles for Social Impact Assessment. May 1994, revised in 2003.
- Harris, Charles C, et al. 2003 Community-based SIA. *Impact Assessment and Project Appraisal* Vol.21:109-118
- 大田原高昭, 守友裕一 1983 年「苫小牧東部開発と沙流川水資源問題」大沼, 池田, 小田(編)『地域開発政策の課題』pp.168-188
- 沙流川水資源対策調査団 1976 年 沙流川水資源問題に関する調査報告書
- Taylor, Nichokas, C, et al. 2004. *Social Assessment: Theory, Process and Techniques*. Middleton: Scoial Ecology Press
- Wilson, C. R. and C. Urion. 1995. *Native Peoples: The Canadian Experience*. Toronto: Oxford University Press.